

尹湾漢墓簡牘三・四号木牘について

——その復元を中心として——

西 川 利 文

は じ め に

尹湾漢墓簡牘は、一九九三年に江蘇省連雲港市東海温泉鎮尹湾村西南に位置する漢墓群（一〇数基のうち六基を発掘）から出土した一群の簡牘の総称で、その中心は六号墓出土の木牘二三枚と竹簡一三三本であり、さらに二号墓出土の木牘一枚がある。このうちで注目したいのは、六号墓出土の一号、六号に編号される六枚の木牘である。そこには、従来の文献史料からは断片的にしかわからなかった漢代の地方行政に関する記載が、東海郡という一郡についてではあるが、かなり詳細かつ体系的に記されている。そして他の簡牘から六号墓の墓主は、師饒という人物で字を君兄といい、前漢成帝の晩期（前一〇年代後半）には東海郡の属吏を勤めていたことが確認される。従って右の六枚の木牘も、成帝晩期を中心とする前漢後半期の地方行政の一端を物語るものと考えられる。

このような情報は一九九五年一〇月二九日付の『中国文物報』の報道^①である程度判明していたが、簡牘の釈文・写真が公表されたのは『文物』一九九六年八期においてであり、そこには尹湾漢墓群の発掘報告及び簡牘群の概要も掲載された^②。これによって当該簡牘の分析が可能となったが、そこに掲載された釈文（以下「釈文選」と略称）は、全ての簡牘についてのものではなかった。そこで、この簡牘の全貌を知ることのできる報告書の刊行が待たれてい

たが、一九九七年九月にそれが、連雲港市博物館・東海県博物館・中国社会科学院簡帛研究中心・中国文物研究所の共編で『尹湾漢墓簡牘』と題して中華書局から出版された(以下『報告書』と略称)。この『報告書』は尹湾漢墓群出土の全簡牘の写真及び釈文を中心に構成され、そこに、当該簡牘の紹介及び釈読過程を記した「前言」と、附録として「尹湾漢墓発掘報告」と図表が付され、さらに簡牘以外の主要出土遺物も写真で掲載されている。これによって尹湾漢墓簡牘の全貌が明らかになったといえるから、今後この簡牘を使った研究が増えていくことは間違いないだろう。

さて『文物』誌上における一部の釈文・写真の公表後、中国・台湾・日本でこの簡牘を使った論考が次々に発表され、筆者も一号・二号・五号の各木牘に見える地方行政に関する記事から、県を中心に郡県の構造について簡単な分析を行った^⑤。その結果これらの木牘の記載内容は、東海郡はもちろんのこと、前漢後半期における全郡県の行政組織にも通じるような一定の普遍性を持つていることを指摘した。このことから少なくとも上記三種の木牘は、歴史的な分析に十分に耐え得る史料だと考える。しかし前稿^⑥では、これら三種の木牘に限っても十分な分析ができたとはいえない。また前稿でも触れたように筆者の関心は、『文物』誌上には写真も釈文も掲載されなかったが、漢代察举制度とも関連する記事があるといわれる三・四号木牘にあり、この木牘も今回の『報告書』で公表された。そこで本稿では、三・四号木牘の分析を中心に、前稿で不十分だった点も補うことにしたい。

ところで三・四号木牘を写真で見ると、そこには一部に文字の消えている箇所があり、赤外線カメラとコンピュータ画像処理によって釈読した(「前言」という『報告書』釈文でも一部釈読できていない部分がある。しかしその多くは、両木牘内の記載様式や他の木牘の記載内容によって、類推・補充できるものである。そこで本稿では、三・四号木牘を有効に利用するために、まず『報告書』所載の両木牘に関する釈文を他の木牘の釈文をも利用して補訂し、両木牘の記載内容の復元を試みたい。その時、三・四号木牘の史料価値のみならず、この二枚の木牘と他

の木牘との関連性もある程度明らかとなるだろう。

なお尹湾漢墓簡牘は、「集簿」の標題を持つ一号木牘など一部の簡牘を除くと、釈読者が簡牘の記載内容によって付けた仮の標題であり、各報告によつて同一の簡牘に異なる名称が付けられることがある。恐らく今後は『報告書』の標題に統一されることになろうが、一方では研究の進展によつてその標題が変更されることも予想される。

そこで本稿では、中心に使用する木牘について無用の混乱を避けるために、全て「〇号木牘」として共通の木牘番号を使うことにしたい。また『報告書』釈文には「釈文選」既発表分の釈文と異なる釈読の箇所があるが、本稿では原則として『報告書』の釈文を用いることにし、両釈文間の文字の異同で本稿で使用する範囲で重要なものについては、筆者が判断することにする。

一 三・四号木牘概観

はじめにも述べたように尹湾漢墓簡牘に見える地方行政に関する記事は、前漢後半期の東海郡に関するものである。それは、『漢書』卷二八地理志(以下、地理志とする)に見える県・侯国と二号木牘に見えるそれとが、若干の文字の異同を除いて一致することからも確認できる。ただ二号木牘には地理志に見えない塩官が存在し、また一号木牘からは、県・侯国以外に東海郡には「皇太后・皇后・公主の食する所」(『漢書』卷一九百官公卿表上)とされる呂が二つ存在したことが確認される^⑩。その結果、尹湾漢墓簡牘が作成された当時の東海郡には、県と侯国それぞれ一八と二つの邑、そして四つの塩官と二つの鉄官(但し塩鉄官の長官は各一名)が存在したことが判明する^⑪。これら県・邑・侯国・塩官・鉄官(以下、特に区別する必要のない場合、一括して県とする)には、中央政府から派遣される二百石以上の官秩を持つ官僚と地元で採用(辟召)される百石以下の属吏とが存在し、彼らによつて行政が行われたが、その構造は前稿で検討したように二号木牘の記載内容によつて詳細に判明する。

ただここであらかじめ注意しておくべきは、二号木牘が県の構造を知り得る資料としても、それは郡府でまとめられたものなのと同様、本稿の中心となる三・四号木牘も含めて地方行政に関する一号く六号木牘は全て郡府で集計された記録だということである。その作成者は郡の属吏を勤めた墓主の師饒だと考えられるが、一号く六号木牘が郡府で集計されたものであれば、少なくともこの六枚の木牘は郡の行政における何らかの目的のために作成されたものだといえよう。^⑬ このようないわば公文書的性格を持つ記録が何故個人の墓葬に埋葬されたのかについての問題があるが、ここではそれに触れないことにして、これらの木牘には県の情報が詳細に記されることがあるものの、それが県廷で作成されたものではないという点を確認しておこう。

さて県の行政担当者のうち中央派遣にかかる官僚には、県の大小・種別によって令・長・相と名称の異なる長官（以下、長官とする）と、それを補佐する丞・尉があり、彼らは一括して「長吏」^⑭と呼ばれた。本稿で中心に取り上げる三・四号木牘は「東海郡下轄長吏名籍」という仮の標題『報告書』^⑮が示すように、この木牘が作成された当時に東海郡管轄下の県に在籍したこれら「長吏」の名簿と考えられる。そこには、未判読部分も含めて一四五名の長吏に関する情報が記される。しかもそれは単なる名簿ではなく、そこにはその長吏の出身郡県、前職、現職への異動理由も記されている。このことによつて、両木牘は漢代の官僚制、あるいは考課制度・察举制度を分析する上で貴重な史料となると考えられる。

ところで両木牘はいずれも長さ二三cm・幅七cm^⑯という幅の広い木牘で、三号木牘は両面をそれぞれ三段に分けて各段一六く二〇行にわたつて文字を記し、四号木牘は片面のみを使用し、二段に分けて第一段一七行・第二段一八行の記載が見られる。ただし四号木牘も本来は三段に分けて文字を記す予定だったようで、三段目に当たる部分が空白になっている。このように一つの木牘を複数段に分けて文字を記す予定だったようで、記された情報を整理するためには、何らかの記号を付す必要があると思われるが、『報告書』^⑰ 釈文はそれを行っていない。そこで、任意の記

号を施して『報告書』所載の三・四号木牘積文を次に掲載しておこう。この任意の記号の説明をしておくと、まず行頭の数字は、筆者が前稿で二号木牘をもとに作成した一覧表に付した県の番号と一致する。同じく行頭の小文字アルファベットは、県名が不明で前稿一覧表と照合できないものを示す。ただし行頭の数字・記号は、同一の県が続く(と思われる)場合、最初の箇所にのみ付けた。次に各行末に付した数字・記号は、木牘番号とその表裏、段数、行数を表す。例えば三号木牘正面の第一段一行目ならば、3A-1-1として示した。

三号木牘

(a)……故博陽令以秀材遷(3A-1-1)

(3A-1-2)

□□□山陽郡東緡司馬敞故□□有秩以功次遷(3A-1-3)

……郡□徐□故□陵長以功遷(3A-1-4)

……右尉沛郡相郎延年故侍郎以功遷(3A-1-5)

(2)下邳令六安国陽泉李忠故長沙内史丞以捕羣盜尤異除(3A-1-6)

下邳丞沛郡竹朱□故豫州刺史從事史以捕格山陽亡徒將率(3A-1-7)

下邳左尉沛郡相□□故腹士候□□□請詔除(3A-1-8)

下邳右尉沛郡斬□義……從史以廉遷(3A-1-9)

(1)海西令琅邪諸王宣故漁陽□□左騎千人以功遷(3A-1-10)

海西丞(3A-1-11)

海西左尉広陵郡全椒張未央故大□□以□遷(3A-1-12)

海西右尉臨淮郡射陽武彭祖故海塩丞以廉遷(3A-1-13)

(b)□□□臨淮郡徐劉曾故□□令以功次遷(3A-1-14)

……山陽郡瑕丘……(3A-1-15)

(正面第一段)

……(3A-1-16)

……(3A-2-1)

(5) 胸邑令……遷(3A-2-2)

胸邑丞臨淮郡取慮楊明故長……以功遷(3A-2-3)

胸邑左尉楚國奮丘田章始故東郡大守文学以廉遷(3A-2-4)

胸邑右尉楚國彭城□殷故相書佐以廉遷(3A-2-5)

(7) 戚令丹陽郡句容□道故楊州刺史從事史以秀才遷(3A-2-6)

戚丞陳留郡寧陵丁隆故廷史以請詔除(3A-2-7)

戚左尉魯國魯史父慶故仮亭長以捕格不道者除(3A-2-8)

戚右尉汝南汝陰肩□故大守屬以廉遷(3A-2-9)

(6) 襄[襄]令北海郡淳于王賀故青州刺史從事史以秀[材]遷(3A-2-10)

襄[襄]丞丹陽郡溧陽夏侯武故侯家丞以功遷(3A-2-11)

襄[襄]左尉梁國碭陳褒故相書佐以廉遷(3A-2-12)

襄[襄]右尉沛郡銓朱福故曲陽尉以功遷(3A-2-13)

(8) 費長山陽郡都閔孫敞故広邑長以廉遷(3A-2-14)

費丞汝南郡汝陰郭□故廷尉史……(3A-2-15)

費左尉山陽郡薄周□□故……(3A-2-16)

費右尉汝南……(3A-2-17)

(13) ……(3A-2-18)

(正面第二段)

開陽丞山陽郡栗鄉侯國家聖故侯僕以功遷(3A-3-1)

開陽左尉潁川郡許胡忠故御史有秩以功遷(3A-3-2)

開陽右尉琅邪郡桓王蒙故游徼以捕羣盜尤異除(3A-3-3)

(9) 即丘長膠(東)國昌武范常故不夜長以廉遷(3A-3-4)

即丘丞東郡東阿周喜故頓丘北鄉有秩以功次遷(3A-3-5)

即丘左尉潁川郡潁陰王昌故大守卒史以功遷(3A-3-6)

即丘右尉琅邪郡房山逢賢故侯行人以功遷(3A-3-7)

(12) 況其長沛郡斬陳勝故陰陵右尉以功遷(3A-3-8)

況其丞(3A-3-9)

況其左尉琅邪郡柔侯國宗良故侯門大夫以功次遷(3A-3-10)

況其右尉琅邪郡石山王奉故侯僕以功遷(3A-3-11)

(11) 利成長(3A-3-12)

利成丞汝南郡汝陰兗黥故罷將戶車□□□□令史水衡都尉書佐(3A-3-13)

利成左尉六安國六殷順故番夫以捕斬羣盜尤異除(3A-3-14)

利成右尉南陽郡堵陽邑張崇故亭長以捕格山陽亡徒尤異除(3A-3-15)

(10) 厚丘長臨淮郡取慮邑宋康故丞相屬以廉遷(3A-3-16)

厚丘丞琅邪郡高広侯國王恁故侯門大夫以功次遷(3A-3-17)

厚丘左尉汝南郡汝陰陳逢故五官□□□□以功遷(3A-3-18)

厚丘右尉汝南郡汝陰故大司農屬以功遷(3A-3-19)

(c) ……陽王良?遷(3B-1-1)

□□丞潁川郡長社張□□有秩以功遷(3B-1-2)

□□左尉南陽郡涅陽邑幾級故亭長以捕格山陽賊尤異除(3B-1-3)

□□右尉東郡廩丘張循故白馬□成鄉有秩以功次遷(3B-1-4)

(16) 平曲長梁國蒙辛千秋故□□□以功遷(3B-1-5)

平曲丞琅邪郡胡毋欽故亭長以捕格羣盜尤異除(3B-1-6)

平曲丞陳留郡……(3B-1-7)

(15) 司吾長沛郡蕭劉奉上故孝者以宗室子舉方正除(3B-1-8)

(正面第二段)

……右扶風平陵……遷(3B-1-9)

司 吾左尉魯國薛……以功遷(3B-1-10)

司 吾右尉潁川郡許……(3B-1-11)

(18) 曲陽長沛郡相陳宮故□□以功遷(3B-1-12)

曲陽丞沛郡相朱博故東郡大守文學卒史以功遷(3B-1-13)

曲陽尉汝南郡召陵夏聖故南海大守文學卒史以功遷(3B-1-14)

(17) 臨沂長魯國魯一武故相守史以舉方正除(3B-1-15)

臨沂丞沛郡建平周朋故侯行人以功遷(3B-1-16)

臨沂左尉琅邪博石成禁故侯僕以功遷(3B-1-17)

臨沂右尉定陶國定陶魏□故孝者以孝廉遷(3B-1-18)

(19) 合鄉長左馮翊臨晉駱嚴故郎中騎以詔除(3B-1-19)

合鄉丞信都郡桃侯國李遷故侯門大夫以功遷(3B-1-20)

(20) 承長□□郡□□泉故相……(3B-2-1)

承丞廬江郡庾婁莊戌故督盜賊以捕斬羣盜(3B-2-2)

(21) 昌慮相淮陽國圉蔡義故穀陽丞以功遷(3B-2-3)

昌慮丞京兆尹新豐馮豐故衛尉屬以功遷(3B-2-4)

昌慮左尉沛郡譙丁禁故貶秩郎中(3B-2-5)

昌慮右尉左馮翊万年王義故御史有秩以功遷(3B-2-6)

(22) 蘭旗相臨淮郡僮夏彭祖故□徒丞以廉遷(3B-2-7)

蘭旗丞淮陽國陳張永國故亭長以廉遷(3B-2-8)

蘭旗左尉(3B-2-9)

蘭旗右尉(3B-2-10)

(24) 良成相汝南郡細陽周□故□□□□以功遷(3B-2-11)

(背面第一段)

良成丞山陽郡橐宣聖故大山大守文学卒史以功遷(3B-2-12)

良成尉□□□□故貶秩山□□(3B-2-13)

(25) 南城相……故保宮北□□以功遷(3B-2-14)

南城丞巨□郡□張良故有秩以功遷(3B-2-15)

南城尉山陽郡東緡陳順故大守卒史以功遷(3B-2-16)

(23) 容丘相臨淮郡睢陵鄭賽故丞相属以廉遷(3B-2-17)

容丘丞琅邪郡即來閔常故侯行人以功遷(3B-2-18)

容丘尉潁川潁陰東門湯故大守卒史以功遷(3B-2-19)

(29) ……(3B-3-1)

平曲丞潁川郡長社□□故汧陽大守……以功遷(3B-3-2)

平曲侯国尉潁川郡鄆殷臨故貶秩□□(3B-3-3)

(26) 陰平相河南郡故市張霸故郎中以積功(3B-3-4)

陰平丞沛郡沛莊敞故有秩以功遷(3B-3-5)

陰平尉山陽郡薄毛雲故有秩以功遷(3B-3-6)

(30) 建陵相山陽郡单父曾聖故郎中以功遷(3B-3-7)

建陵丞京兆尹南陵盛咸故郎中以功遷(3B-3-8)

(37) 建陽相山陽郡邳成唐湯故鄉獄丞以功遷(3B-3-9)

建陽丞京兆尹奉明王豐故校前曲候令史以功遷(3B-3-10)

(31) 山鄉相魯国魯旦恭故亭長以捕格不道者除(3B-3-11)

山鄉丞魯国魯橋敬故亭長以捕格不道者除(3B-3-12)

(28) 東安相河南郡密故郎中騎以請詔除(3B-3-13)

東安丞沛郡栗丁勲故侯門大夫以功遷(3B-3-14)

(33) 都平相山陽郡橐宣元故龍仇尉以功遷(3B-3-15)

(背面第二段)

都平丞陳留郡襄邑共褒故□事□廩丘右尉(3B-3-16)

(38) 都陽相□陽郡昌邑曹平故郎中以功遷(3B-3-17)

都陽……(3B-3-18)

(背面第三段)

四号木牘

(d) □□相沛郡……以功遷(4A-1-1)

□□丞沛郡譙呂遷故有秩以功遷(4A-1-2)

(e) □□鄉相陳留郡陳留李臨故侍郎以請詔除(4A-1-3)

□□鄉丞淮陽國□營忠故貶秩東昌相(4A-1-4)

(35) 建鄉相山陽郡□□管費故將軍史以十歲補(4A-1-5)

建鄉丞(4A-1-6)

(32) 武陽相山陽郡單父張臨故東郡大守文学卒史以廉遷(4A-1-7)

武陽侯國丞汝南郡西華邑尹慶故武都大守文学卒史以功遷(4A-1-8)

(27) 新陽相山陽郡棗張蓋之故河内大守文学卒史以廉遷(4A-1-9)

新陽丞京兆尹長安王相故上筮有秩以功遷(4A-1-10)

(39) 塩官長琅邪郡東莞徐政故都尉屬以廉遷(4A-1-11)

塩官丞汝南郡汝陰唐宣故大常屬以功遷(4A-1-12)

(40) 塩官別治北蒲丞沛郡竹薛彭祖故有秩以功遷(4A-1-13)

(41) 塩官別治郁州丞沛郡敬丘淳于賞故侯門大夫以功遷(4A-1-14)

(42) 鉄官長沛郡相莊仁故臨朐右尉以功遷(4A-1-15)

鉄官丞臨淮郡淮陵 武故校尉史以軍吏十歲補(4A-1-16)

(43) 鉄官別作□丞山陽郡方与朱賢故有秩以功遷(4A-1-17)

(正面第一段)

(24) 良成侯……(4A-2-1)

(22) 蘭旗侯家丞泰山郡廩□開□以功遷(4A-2-2)

- (21) 昌慮侯家丞山陽郡都閔范利国故有秩以功遷(4A-2-3)
- (23) 容丘侯家丞琅邪柔侯国王謹[?]故侯行人以功遷(4A-2-4)
- (25) 南城侯家丞潁川郡周承休王陽故侯行人(4A-2-5)
- (37) 建陽侯家丞泰山郡寧陽侯国夏侯登故侯僕以功遷(4A-2-6)
- (31) 山鄉侯家丞定陶国朱佃故郎中以国人罷補(4A-2-7)
- (33) 都平侯家丞山陽郡黃侯国柏世故侯僕以功遷(4A-2-8)
- (29) 平曲侯家(丞)山陽郡瑕丘管儀故山陽大守文学卒史以功遷(4A-2-9)
- (36) 干鄉侯家丞清河郡清陽陳九故東武有秩以功遷(4A-2-10)
- (30) 建陵侯家(丞)梁国蒙孟遷故象林候長以功遷(4A-2-11)
- (26) 陰平侯家丞山陽郡中鄉石勲故侯門大夫以功遷(4A-2-12)
- (28) 東安侯家(丞)濟南宮平侯国□譚故侯僕以功遷(4A-2-13)
- (35) 建鄉侯家(丞)陳留郡僞陳咸故有秩以功遷(4A-2-14)
- (38) 都陽侯家丞陳留郡成安韓訢故上党大守文学卒史以功遷(4A-2-15)
- (34) 都鄉侯家丞魯国魯曹勲故桂陽大守文学卒史以功遷(4A-2-16)
- (27) 新陽侯家丞承匡已故承鄉侯行人以功遷(4A-2-17)
- (32) 武陽侯家丞

● 凡侯家丞十八人(4A-2-18)

(正面第二段)

この釈文からもわかるように、三・四号木牘はいずれも左右両端を中心に判読できない箇所があり、特に三号木牘に判読不能箇所が目立つ。これを写真で確認すると、この部分はいずれも文字がかすれたり消えたりしている。また三号木牘正面には中ほどに傷があったりして、特にこの木牘の状態が悪い。しかし判読不能箇所のほとんどは、三・四号木牘に見られる書式の特徴からある程度記載内容が推測できる。

三・四号木牘の書式は原則的に、各行ごとに県名、職階、現職者の出身郡県・姓名、前職、現職への異動理由の

順になっている。例えば三号木牘正面第一段の下邳(2)の令(3A-1-6)を見ると、

(木牘作成時の)下邳県の令は六安国陽泉県出身の李忠という人物で、前職の長沙内史丞から「捕羣盜尤異」という理由で現職に「除」された。

ということになる。このように両木牘はそれぞれ、東海郡管轄下の各県の長吏の情報を一行にまとめて記しており、その意味では各行が独立したものとなる。しかし一方では、右に示した下邳令以下に同県の長吏に関する記載が続くように、数行ごとにまとまった記載にもなっている¹⁶⁾。しかもそれは、令・丞・左尉・右尉と職階の順に並んでいる。このように両木牘は、東海郡管轄下の各県について、それを構成する長吏を長官・丞・尉(二尉の場合と尉が存在しない場合がある)という職階順に、それぞれ一まとめにして記載しているのである(但し侯家丞だけは四号木牘正面第二段にまとめて記されている)。

以上のような書式の原則からすると、少なくとも司吾(15)の部分で長に続く行(3B-1-9)には「司吾丞」が入るのは確実である。さらに(a)〜(e)の県名の判明しない県も、前後の記載との関係から、そこに長吏に関する記載が右のような原則で一括して記されていたことが推測できる。問題はこの五つにどの県が該当するかであろう。

二 三号木牘の切断箇所

ところで、三号木牘には注意しておかねばならない点がある。それは、今回写真を見てはじめて判明したことだが、この木牘が第二段と第三段との間で切断されていることである。しかもこの切断は、自然に折れたものではなく、人為的に切断されているように見える。さらに綴合面の左右両端が若干丸まっているから、この木牘は埋葬以前に切断されていた可能性が高い。このように三号木牘の切断が埋葬以前に人為的に施されたとすれば、その理由を考えねばならないが、ここでは保留して今後の課題としておきたい¹⁷⁾。しかしこのような切断によって、綴合の際

に表裏を取り違えれば、釈文が全く違ったものになる危険性をはらむ。その意味で三号木牘の取り扱いには注意せねばならないが、結論としては『報告書』の綴合で問題はないと考える。それ故、右に掲げた第三段の釈文は『報告書』の通りの表裏関係になっている。その理由を、右に述べた三・四号木牘に見られる書式の特徴を手がかりに確認しておく。

まず『報告書』釈文で背面とされる面を見ると、二行目(3B-3-2)が平曲(侯国)丞となっているから、一行目(3B-3-1)は判読できないが長官(相)となるはずである。従ってこの面は、平曲侯国(29)から始まるのは確実である。一方の第三段正面とされる面は開陽丞(3A-3-1)から始まっているから、長官に関する記載は上段の最後の行(3A-2-18)にあると考えられる。次に第二段の表裏それぞれの記載を見ると、背面は最後の行(3B-2-16)が容丘尉であって、ここで容丘侯国(23)の長吏の記載は完結している。一方の正面は、最後から二行目の費右尉(3A-2-17)で費(8)の記載が終わるから、最後の未判読の行は第三段へとつながると考えられる。

この結果、背面第三段は平曲侯国の長官(相)から始まる面、一方正面第三段は開陽丞から始まる面に、それぞれ当たすることは間違いない。従って、正面第二段の最後の行は開陽(13)の長官(長)の記載になり、第三段の丞以下へとつながることになる。ちなみに、上段の記載が下段へと続く例は、三号木牘正面の第一段から第二段にかけても見られる。胸邑(5)は第二段二行目(3A-2-2)から始まるから、一行目(3A-2-1)は上段一四行目(3A-1-14)から始まる未判読の県(6)につながることは間違いない。以上、少々煩雑な検討を行ったが、切断された三号木牘第三段の表裏関係は『報告書』の判断が妥当だと考える。

三 一・二号木牘との照合

さて三号木牘第三段の綴合が『報告書』釈文の通りだとすれば、三・四号木牘の記載には一定の規則性が見えて

くる。すなわち、三号木牘正面第一段(3A-1-1)から第二段一三行目(3A-2-13)は令を長官とする県、一四行目(3A-2-14)から背面第二段二行目(3B-2-2)までは長を長官とする県、それ以降の三号木牘背面(3B-2-3~3B-3-18)及び四号木牘正面第一段一〇行目(4A-1-1~4A-1-10)まづが侯国、ついで塩官・鉄官(4A-11~4A-1-17)が続き、最後に四号木牘正面第二段(4A-2-1~4A-2-18)に侯家丞がまとめて記載されるのである。このような記載方式は、侯家丞を除くと、二号木牘の記載方式と対応する。その関係を表(次頁)に示して確認しておこう(ただし両表とも侯家丞については省略した)。

二号木牘¹⁸は、県を中心として東海郡の郡府以下の長吏・属吏の構成を克明に記したもので、『報告書』はこれを「東海郡吏員簿」と題する。表1は、前稿で二号木牘をもとに作成した一覽表の中から、三・四号木牘と重なる長吏に関する部分を摘出したものである。ただし()で括った部分は、『報告書』釈文で未判読とされるもので筆者が補ったことを示す。¹⁹その理由を示すと、まづ(36)については前稿でも触れたように、侯国で唯一不明な干郷しか入らない。次に(17)~(20)は、「釈文選」では可能性として釈読された県名が妥当だと考えて本稿でも採用した。(17)(18)は、表1と表2の長吏構成の一致から(17)には臨沂、(18)には曲陽が入るのは間違いない。また(19)(20)は長・丞が各一人と同一で判断に困るが、『報告書』ではこの部分の釈文が「□□園員」「□吏□」(二号木牘背面一・二行目)とされ、前者には二字の県、後者には一字の県が入ると考えられるから、(19)が合郷、(20)が承と考えるのが妥当だろう。以上のように、『報告書』釈文で未判読とされた文字でも、一概に「釈文選」の釈読が誤っているとはいえないと考える。(17)~(20)については、「釈文選」が意をもって補ったのだろう。

二号木牘(表1)の県名を右のように確定して、これを三・四号木牘(表2)と照合してみると、三・四号木牘の配列には右に示したよりも詳細に二号木牘の配列と同一の規則性が想定できる。まづ二号木牘の配列を表1で見ると、最初に一千石令の県が配置され、次いで六百石令の県、四百石長の県、三百石長の県、四百石相の侯国、三百石相

の侯国と、同じ令・長・相の中でも官秩の高い方の県が最初に記される。一方の三・四号木牘の配列を表2で見ると、表1とは多少の配列順の異同はあるが、県・侯国名の不明なものを除くと、基本的に表1の傾向と一致する。ただし例外として、二号木牘で三百石相の侯国とされる南城(25)が四百石相の侯国の記載の中に入っている。この理由はわからないが、四号木牘の侯家丞の箇所を見ると四つの四百石相の県について記されているから、これはこ

表1 二号木牘

	県名	長官	丞	尉
1	海西	令1	1	2
2	下邳	令1	1	2
3	鄆	令1	1	2
4	蘭陵	令1	1	2
5	胸襄賁	令1	1	2
6	胸襄賁	令1	1	2
7	戚費	令1	1	2
8	費	令1	1	2
9	即丘	長1	1	2
10	厚丘	長1	1	2
11	利成	長1	1	2
12	況其	長1	1	2
13	開陽	長1	1	2
14	繪	長1	1	2
15	司吾	長1	1	2
16	平曲	長1	1	1
17	(臨沂)	長1	1	2
18	(曲陽)	長1	1	1
19	(合鄉)	長1	1	
20	(承)	長1	1	
21	昌慮*	相1	1	2
22	蘭旗*	相1	1	2
23	容丘*	相1	1	1
24	良成*	相1	1	1
25	南城*	相1	1	1
26	陰平*	相1	1	1
27	新陽*	相1	1	
28	東安*	相1	1	
29	平曲侯国*	相1	1	1
30	建陵*	相1	1	
31	山鄉*	相1	1	
32	武陽*	相1	1	
33	都平*	相1	1	
34	都鄉*	相1	1	
35	建鄉*	相1	1	
36	(干鄉)*	相1	1	
37	建陽*	相1	1	
38	都陽侯国*	相1	1	
39	伊慮塩官	長1	1	
40	北蒲塩官		1	
41	郁州塩官		1	
42	下邳鉄官	長1	1	
43	□鉄官		1	

注)*=侯国

令=千石令
令=六百石令
長=四百石長
長=三百石長
相=四百石相
相=三百石相

表2 三・四号木牘

	県名	長官	丞	尉
a	?	?	?	右尉
1	下邳	令1	1	2
2	海西	令1	1	2
b	?	?	?	?
5	胸戚	令1	1	2
7	胸戚	令1	1	2
6	襄賁	令1	1	2
8	費	令1	1	2
13	開陽	長1	1	2
9	即丘	長1	1	2
12	況其	長1	1	2
11	利成	長1	1	2
10	厚丘	長1	1	2
c	?	?	1	2
16	平曲	長1	1	1
15	司吾	長1	?	2
18	曲陽	長1	1	1
17	臨沂	長1	1	2
20	合鄉	長1	1	
19	承	長1	1	
21	昌慮*	相1	1	2
22	蘭旗*	相1	1	2
24	良成*	相1	1	1
25	南城*	相1	1	1
23	容丘*	相1	1	1
29	平曲侯国*	?	1	1
26	陰平*	相1	1	1
30	建陵*	相1	1	
37	建陽*	相1	1	
31	山鄉*	相1	1	
28	東安*	相1	1	
33	都平*	相1	1	
38	都陽*	相1	?	
d	?	?	1	
e	□郷*	相1	1	
35	建郷*	相1	1	
32	武陽*	相1	1	
27	新陽*	相1	1	
39	塩官	長1	1	
40	塩官別置北蒲		1	
41	塩官別置郁州		1	
42	鉄官	長1	1	
43	鉄官別作邳		1	

注)*=侯国

の木牘の作成者が記載順を誤った可能性が高い。⁽²⁰⁾ いずれにしてもここでは、三・四号木牘の県の配列にも二号木牘と同様に、県の種類及び県の長官の官秩の違いによる記載の区別があったことを確認しておく。

三・四号木牘(表2)の県の配列を右のように考えれば、県名が不明な(a)・(e)に入るのはおのずから限定されてくる。すなわち、(a)・(b)には一千石令の県でその名の見えない郊(3)・蘭陵(4)のいずれかが入り、(c)には四百石長の県で唯一名の見えない繒(14)、そして(d)・(e)には侯国で名の見えない部郷(34)・干郷(36)のいずれかが、それぞれ入ると考えられるのである。ただ(c)の部分は『報告書』積文が、丞(3B-1-2)、左尉(3B-1-3)、右尉(3B-1-4)の上にそれぞれ二字分の未判読文字を想定しているのが気にかかる。⁽²¹⁾ この点は(a)・(b)の県を確定する際にもう一度確認することにして、ここでは(c)を最も可能性の高い繒だと一応考え、次に残る(a)・(b)・(d)・(e)の四つの県を確定しよう。これを確定するためには、五号木牘正面の記載内容が参考になる。

四 五号木牘正面との照合

五号木牘は、すでに「釈文選」にも掲載されており、周知のように正面と背面とでは記載内容が全く異なる。まず背面は郡府内の属吏構成が記されていると判断され、そこからは前漢後半期の郡府における属吏の肥大化傾向が読み取れると考える(前稿参照)⁽²²⁾。一方の正面は、『報告書』がこれを「東海郡下轄長吏不在署、未到官名籍」と題するよう、この木牘作成時の各県廷における不在長吏を記したものと考えられる。その書式は、木牘を四段に分けて「輸錢都内」「繇」「告」「寧」「缺(死・免)」「有効」「未到官」の七項目に分類し、その項目に該当する長吏、合計五二名について、それぞれ一行に県名・職階・姓名・発生月日・該当理由の順に記している(ただし「缺」以下の項目には月日の記載はない)。なお写真で見ると五号木牘は、上端部分が横約5cm・縦最大約1cmにわたって欠けている。この結果、正面はこの木牘の標題を記したと考えられる部分⁽²³⁾が欠け、一方背面は第一段部分のほとん

どの行の冒頭部分が欠落している。また正面から見て左下にも欠けている部分(最大で横約一・五cm・縦約六cm)があるが、正面についてはこの部分には文字はないと考えられる。

さて五号木牘正面(以下、単に五号木牘とのみ記す)に記される五二名という数は、三・四号木牘に記される長吏(二四五名)の約三六%に当たる。また五号木牘に見える県名・職階・姓名という記載は三・四号木牘の記載内容と重複し、その対照によって両種木牘の関連性が確認できるが、結果からいえば以前からいわれているように、両種木牘に記される長吏の姓名及び職階には、かなりの一致が見られる。⁽²⁵⁾そこで以下に五号木牘の全文を掲げ、その関連性を考えてみよう。なおここでも三・四号木牘と同様に記載内容の整理のため、行頭には二号木牘(表1)の県に対応する数字、行末には五号木牘の正面を表す5Aとともに段数・行数を示す記号と数字をそれぞれ付けた。そしてさらに、職階・姓名が三・四号木牘と完全に一致するものには矢印の下に三・四号木牘の対応する箇所の略号を加え、職階が一致するにもかかわらず長吏の姓名が一致しないものには×を付けた。

- (3) 郷右尉郎延年九月十三日輸錢都内(5A-1-1)
- (1) 海西丞周便親七月七日輸錢齊服官(5A-1-2)
- (4) 蘭陵右尉梁樊于九月十二日輸錢都内(5A-1-3)
- (18) 曲陽丞朱博七月廿五日輸錢都内(5A-1-4) → (3B-1-13)
- (20) 承丞莊戌九月十二日輸錢都内(5A-1-5) → (3B-2-2)
- (24) 良成丞宜聖九月廿一日輸錢都内(5A-1-6) → (3B-2-12)
- (25) 南城丞張良九月廿一日輸錢都内(5A-1-7) → (3B-2-15)
- (36) 干郷丞□□九月十二日輸錢都内(5A-1-8)
- (25) 南城尉陳順九月廿一日輸錢都内(5A-1-9) → (3B-2-16)

● 右九人輸錢都内(5A-1-10)

- (3) 鄉獄丞司馬敞正月十三日送罰戍上谷(5A-1-11)
 (3) 鄉左尉孫嚴九月廿一日送罰戍上谷(5A-1-12)
 (5) 胸邑丞楊明十月五日上邑計(5A-1-13) → (3A-2-3)
 (8) 費長孫敞十月五日送衛士(5A-1-14) → (3A-2-14)
 (13) 開陽丞家聖九月廿一日市魚就財物河南(5A-1-15) → (3A-3-1)
 (9) 即丘丞周喜九月廿一日市□_就□□(5A-1-16) → (3A-3-5)
 (12) 國其邑左尉宗良九月廿三日守丞上邑計(5A-1-17) → (3A-3-10)
 (10) 厚丘丞王延十月廿日□□_區□(5A-2-1) → (3A-3-17)
- (第一段)

- (10) 厚丘右尉周並三月五日市材(5A-2-2)
 (16) 平曲丞胡毋欽七月七日送徒民敦煌_{敦煌}(5A-2-3) → (3B-1-6)
 (15) 司吾丞北宮憲十月五日送罰戍上谷(5A-2-4)
 (37) 建陽相唐湯十一月三日送保宮□(5A-2-5) → (3B-3-9)
 (31) 山鄉侯相□□十月……(5A-2-6)

● 右十三人繇(5A-2-7)

- (7) 威令□□十一月十四日告(5A-2-8)
 (13) 開陽長顏駿正月五日告(5A-2-9)
 (9) 即丘長范常十一月四日告(5A-2-10) → (3A-3-4)
 (23) 容丘尉東門湯正月十二日告(5A-2-11) → (3B-2-19)
 (38) 都陽丞王賞正月廿日告(5A-2-12)
 (34) 都鄉侯相李臨八月晦告病(5A-2-13)
 ● 右六人告(5A-2-14)

- (3) 鄉令華喬十月廿一日母死寧(5A-2-15)
 (6) 襄責左尉陳褒十一月廿日兄死寧(5A-2-16) → (3A-2-12)

(?) □□丞□□月廿八日伯兄²死寧(5A-2-17)

(第二段)

(11) 利成丞兒勲八月十九日父死寧(5A-3-1)→(3A-3-13)

(10) 厚丘左尉陳逢十月十四日子男死寧(5A-3-2)→(3A-3-18)

(18) 曲陽尉夏筐十月廿五日伯父死寧(5A-3-3)

●右六人寧(5A-3-4)

(3) 郟丞石承死(5A-3-5)

(2) 下邳令李忠死(5A-3-6)→(3A-1-6)

(4) 蘭陵左尉周奮死(5A-3-7)

(7) 戚丞丁隆死(5A-3-8)→(3A-2-7)

(19) 合鄉長駱巖死(5A-3-9)→(3B-1-19)

(42) 鉄官長莊仁死(5A-3-10)→(4A-1-15)

(42) 鉄官丞薛鐔死(5A-3-11)→×

(17) 臨沂丞周俚免(5A-3-12)

(34) 郟鄉丞營忠免(5A-3-13)

(32) 武陽丞尹慶免(5A-3-14)→(4A-1-8)

●右十人缺七人死三人免(5A-3-15)

(18) 曲陽長陳宮有劾(5A-3-16)→(3B-1-12)

(26) 陰平尉毛雲有劾(5A-4-1)→(3B-3-6)

●右二人有劾(5A-4-2)

(12) 況其邑丞孔寬(5A-4-3)

(22) 蘭旗左尉孫吉(5A-4-4)

(22) 蘭旗右尉鄭遵²(5A-4-5)

(26) 陰平丞成功禁(5A-4-6)→×

(第三段)

(35) 建郷丞虞賀(5A-4-7)

(27) 新陽丞上官由(5A-4-8)→×

● 右六人未到官(5A-4-9)

(第四段)

具体的な分析に入る前に、五号木牘の「輸錢都内」以下の項目内における記載順には注意しておかねばならない。それは、紙屋正和氏も指摘するように、この記載順が決して発生順に記されていないということである。各項目内の県の配列を注意して見ると、そこには各県の長官の官秩順に並んでいることが判明する。例えば最も掲載人数の多い「繇」の項目(5A-1-11)~(5A-3-6)を見ると、まず千石令の郷、次いで六百石令の胸、四百石長の費から司吾、そして三百石相の建陽・山郷の両侯国となっている。この傾向は他の項目でも変わらず、「輸錢都内」で南城丞と南城尉の間に干郷丞が入っているが、両県はいずれも三百石相の侯国で長官の官秩でいえば何ら問題はない。⁽²⁷⁾また「缺」の項目は、「死」と「免」で区別し、その中で官秩順の配列がなされている。すなわち五号木牘の各項目内における記載順は、二号木牘や三・四号木牘と同様、各県の長官の官秩に応じて一般県・侯国・塩鉄官の順に記されたといえるのである。尹湾漢墓簡牘以外の記録類にいえるかどうかはわからないが、郡府で管轄下の県に関する情報をまとめる際に、県の長官の官秩及び県の種別によって分類して記す方式が、少なくとも前漢後半期における文書の整理方式の一つとして存在したことだけは確実である。これを確認した上で具体的考察に入ろう。

さて五号木牘の記載内容と三・四号木牘のそれとは、どれほど一致するのだろうか。これを確認してみると、五二例中二五例が職階・姓名ともに完全に一致する。また姓名の一部が異なるものとして、次の例がある。

曲陽尉夏筐十月廿五日伯父死寧(5A-3-3)

臨沂丞周棚免(5A-3-12)

この二例は、三・四号木牘の該当部分には「曲陽尉汝南郡召陵夏聖」(3B-1-14)、「臨沂丞沛郡建平周朋」(3B-1-16)とあり、後者は人偏の有無の差であり、前者は「聖」の部分に？印が付されて釈読に疑問が残るものである。従つてこの二例は、一致例と見ても差し支えないと考える。そうすると、五号木牘と三・四号木牘で一致するものは五二例中二七例となり、一致例が五割を超えることになる。これは、いずれかの木牘に判読できない部分があることからすれば、五号木牘と三・四号木牘とが密接に関連するものだとすることを示すといえよう。

一方、一致しないのは三例にとどまる。これは、一致率と比べればはるかに少ない。しかも記載の一致しない部分が「死」あるいは「未到官」の項目に限られるという点に注目したい。「死」「未到官」とは、一種の欠員状態である。従つてこの事態が、三・四号木牘作成の以前か以後に発生したとすれば、不一致の部分は誤記の可能性はなくなる。さらに注目すべき点として、「死」「免」の項目に三・四号木牘と県名・職階・姓名の一致するものが五例あることが挙げられる。これは、三・四号木牘作成時に在職していた者が、その後の五号木牘作成時に死亡していたか、または免官になつていたことを意味する。すなわち、五号木牘の方が三・四号木牘よりも後に作成されたことは確実である。両種の木牘は、同時に作成されたものではないのである。そうすると、この作成間隔がどれ程かを考えなければならぬが、ここでは三・四号木牘と五号木牘との記載で一致する箇所注目して、五号木牘の記載から三・四号木牘で判読できない箇所を確定しておこう。

さて五号木牘が三・四号木牘よりも後に作成されたのだから、五号木牘に見える長吏の姓名が三・四号木牘のそれと一致すれば、その人物が三・四号木牘作成時から五号木牘作成時まで、同一の県の長吏にとどまっていたと想定できよう。この想定のもとで、まず三号木牘で県名の判明しない(a)と(b)の県について検討してみよう。この二つの県は、前にも述べたように二号木牘で千石令の県とされる郷(3)と蘭陵(4)だと考えられるが、五号木牘には両県に関する記載が多く見られる。これを摘出して県ごとにまとめると、次のようになる。

郷令華喬十月廿一日母死寧(5A-2-15)

郷丞石承死(5A-3-5)

郷左尉孫嚴九月廿一日送罰戌上谷(5A-1-12)

郷右尉郎延年九月十三日輸錢都内(5A-1-1)

郷獄丞司馬敞正月十三日送罰戌上谷(5A-1-11)

蘭陵左尉周奮死(5A-3-7)

蘭陵右尉梁樊于九月十二日輸錢都内(5A-1-3)

この中で、まず郷県に関する長吏名が(a)の部分に二例見える。第一は郷右尉の郎延年であり、3A-1-5に「…右尉沛郡相郎延年」とある。第二は郷獄丞の司馬敞で、3A-1-3に「□□山陽郡東緡司馬敞」として現われている。ちなみに二号木牘によると、獄丞は東海郡では郷県にしか置かれていない。しかも(a)の部分は五行にわたって一つの県の情報に記されている。そうすると(a)には、令・丞・左右尉に加えて獄丞という五人の長吏が存在する郷県を当てるのが妥当である。この結果3A-1-1から3A-1-5の記載順は、前に確認したこの木牘の記載の規則性と獄丞が3A-1-3に入ることから、令・丞・獄丞・左尉・右尉となろう。ただし五号木牘で「孫嚴」とされる郷左尉は三号木牘では「徐□」と釈読され、また五号木牘に見える郷令の「華喬」と郷丞の「石承」も、三号木牘では姓名が確認できない。作成時期にある程度の間隔があることを考えると、五号木牘に記される人物が、そのまま三号木牘の該当箇所に入るかは直ちに判断できない。

作成間隔に伴う長吏姓名の異同の問題はともかくとして(a)が郷県だとすれば、(b)の県は蘭陵の可能性が最も高い。しかし三号木牘のこの部分は写真でも文字が判読できない箇所が多く、五号木牘の記載から(b)を蘭陵だと直接裏付けられない。そこでここでは、前に繪(14)が入るのが自然だと考えた(c)には、蘭陵は該当しないことを

示して間接的に証明しよう。三号木牘の(c)の部分は、県名は確認できないが長吏の姓名は確認できる。そこで、五号木牘で姓名の確認できる左尉と右尉の箇所を(c)の部分から摘出すると、

□□左尉南陽郡涅陽邑幾級(3B-1-3)

□□右尉東郡廩丘張循(3B-1-4)

とあつて、右に示した五号木牘の蘭陵左尉の「周奮」と右尉の「梁樊干」とは全く一致しない。前に見た三・四号木牘と五号木牘との一致率と三・四号木牘の県の配列の規則性からすれば、(c)の部分に蘭陵が入る可能性はほとんどない。すなわち(c)は繒の可能性が最も高く、その結果、蘭陵は(b)に当てはめるのが最も妥当だと考えるのである。そして二号木牘によると蘭陵には令・丞と二人の尉がいるから、(b)の部分(3A-1-14~3A-2-1)の四行分の記載順は当然、令・丞・左尉・右尉になるはずである。

次に残る(d)(e)について、右と同様の手続きによつて検討しよう。(d)(e)は侯国であり、一般の県は入らない。従つて若干の不安が残る蘭陵や繒の可能性は全くなく、そこに想定されるのは部郷(34)・干郷(36)の両侯国のみである。そこで両侯国に関する記載を五号木牘から摘出すると、次のようになる。

干郷丞□□九月十二日輸錢都内(5A-1-8)

部郷侯相李臨八月晦告病(5A-2-13)

部郷丞宮忠免(5A-3-13)

このように二つの侯国に関する記載は三例と少なく、しかも干郷の方は姓名がわからない。しかし残る二例の部郷侯相の李臨と部郷丞の宮忠は、(e)の相の箇所(4A-1-3)に「陳留郡陳留李臨」、同じく丞の箇所(4A-1-4)に「淮陽国□宮忠」として見え、(e)が表1の部郷に当たすることは間違いない。そうすると(d)は自動的に干郷ということになる。

以上によって、県名が判読できなかった(a)～(e)の五つの県・侯国について、ほぼ完全にその県名は確定できたと考える。これを二号木牘に見える長官の官秩の区別をも参照して表示すれば、表3のようになる。

表3 三・四号木牘復元

	県名	長官	丞	尉
3	郷	令1	1	2
2	下邳	令1	1	2
1	海西	令1	1	2
4	陵	令1	1	2
5	胸	令1	1	2
7	威	令1	1	2
6	賁	令1	1	2
8	費	令1	1	2
13	開陽	長1	1	2
9	即丘	長1	1	2
12	況其	長1	1	2
11	利成	長1	1	2
10	厚丘	長1	1	2
14	繒	長1	1	2
16	曲	長1	1	1
15	司吾	長1	1	2
18	曲陽	長1	1	2
17	臨沂	長1	1	1
19	合郷	長1	1	2
20	承	長1	1	2
21	慮	相1	1	2
22	蘭旗	相1	1	1
24	良成	相1	1	1
25	南城	相1	1	1
23	容丘	相1	1	1
29	平曲	相1	1	1
26	陰平	相1	1	1
30	建陵	相1	1	1
37	建陽	相1	1	1
31	山郷	相1	1	1
28	東安	相1	1	1
33	都郷	相1	1	1
38	都陽	相1	1	1
36	干郷	相1	1	1
34	部郷	相1	1	1
35	建郷	相1	1	1
32	武陽	相1	1	1
27	新陽	相1	1	1
39	塩官	長1	1	1
40	塩官別置北蒲		1	1
41	塩官別置鄆州		1	1
42	鉄官	長1	1	1
43	鉄官別作		1	1

注) * = 侯国
 令 = 千石令
 令 = 六百石令
 長 = 四百石長
 長 = 三百石長
 相 = 四百石相
 相 = 三百石相

ところで三・四号木牘には、未判読ではなく長吏の姓名の部分が書き落されている例が二例あり、そのうちの「厚丘右尉汝南郡汝陰故大司農属」(3A-3-19)とこう例は、五号木牘に「厚丘右尉周並三月五日市材」(5A-2-3)とあることによって、その人物が「周並」である可能性がある。また三・四号部分の未判読部分でも、五号木牘によって補える箇所があり、逆に五号木牘の未判読の姓名で三・四号木牘から補えるものもある。このように、五号木牘によって三・四号木牘の未判読部分及び欠落部分が補えるが、前にも述べたように両種木牘の作成時期の違いによって、県名はともかくとして、不明な長吏の姓名を五号木牘から推測することは多少の危険性を伴う。しかし一方では、前に見た両種木牘の記載の一致率の高さから、五号木牘に見える長吏の姓名が三・四号木牘の不明部分に全く該当しないともいえない。そこで多少の危険性は含みつつも、以上に述べた二号木牘や五号木牘から得られる情報を参照して三・四号木牘の未判読部分を補い、それを復元してみよう。なおここでは、『報告書』釈文が可能

性として釈読した文字に付けている□と？の記号は、その釈読がほぼ妥当だと考えて削除した。また（ ）の部分は今までの検討によってほぼ確実に復元できるもの、へ は同様に可能性として復元できるもの、そして「」は具体的内容は判明しないが三・四号木牘の書式から類推できるものを示す。さらに参考のために、五号木牘にその職名が見える県の長吏については、その該当箇所の略号を矢印の下に加えておく。⁽³¹⁾

《三・四号木牘復元試案》

- (3) 〔鄭令〕、〔出身郡県〕、〈華喬〉、故博陽令、以秀才遷(3A-1-1)→(5A-2-15)
〔鄭丞〕(3A-1-2)→(5A-3-5)
〔鄭獄丞〕、山陽郡東緡、司馬敝、故□□有秩、以功次遷(3A-1-3)→(5A-1-11)
〔鄭左尉〕、〔出身〕郡□、徐□〈孫敝？〉、故□陵長、以功遷(3A-1-4)→(5A-1-12)
〔鄭〕右尉、沛郡相、郎延年、故侍郎、以功遷(3A-1-5)→(5A-1-1)
(2) 下邳令、六安国陽泉、李忠、故長沙内史丞、以捕羣盜尤異除(3A-1-6)→(5A-3-6)
下邳丞、沛郡竹、朱□、故豫州刺史從事史、以捕格山陽亡徒將率(3A-1-7)
下邳左尉、沛郡相、□□、故復土候□□、〔以〕請詔除(3A-1-8)
下邳右尉、沛郡斬、□義、〔職名の一部〕從史、以廉遷(3A-1-9)
(1) 海西令、琅邪諸、王宣、故漁陽□□左騎千人、以功遷(3A-1-10)
海西丞(3A-1-11)→(5A-1-2)
海西左尉、広陵郡全椒、張未央、故大□□、以□遷(3A-1-12)
海西右尉、臨淮郡射陽、武彭祖、故海塩丞、以廉遷(3A-1-13)
(4) 〔蘭陵令〕、臨淮郡徐、劉曾、故□□令、以功次遷(3A-1-14)
〔蘭陵丞〕、山陽郡瑕丘、〔姓名、前職、異動理由〕(3A-1-15)
〔蘭陵左尉〕、〔出身郡県〕、〈周奮〉、〔前職、異動理由〕(3A-1-16)→(5A-3-7)

〔蘭陵右尉〕、〔出身郡県〕、〈梁樊于〉、〔前職、異動理由〕(3A-2-1)→(5A-1-3)

(5) 胸邑令、〔出身郡県、姓名、前職、異動理由〕遷(3A-2-2)

胸邑丞、臨淮郡取慮、楊明、故長〔職名の一部〕、以功遷(3A-2-3)→(5A-1-13)

胸邑左尉、楚国留丘、田章始、故東郡大守文学、以廉遷(3A-2-4)

胸邑右尉、楚国彭城、□殷、故相書佐、以廉遷(3A-2-5)

(7) 戚令、丹楊郡句容、□道、故楊州刺史從事史、以秀才遷(3A-2-6)→(5A-2-8)

戚丞、陳留郡寧陵、丁隆、故廷史、以請詔除(3A-2-7)→(5A-3-8)

戚左尉、魯国魯、史父慶、故仮亭長、以捕格不道者除(3A-2-8)

戚右尉、汝南汝陰、肩□、故大守属、以廉遷(3A-2-9)

(6) 襄賁令、北海郡淳于、王賀、故青州刺史從事史、以秀才遷(3A-2-10)

襄賁丞、丹楊郡溧陽、夏侯武、故侯家丞、以功遷(3A-2-11)

襄賁左尉、梁国碭、陳褒、故相書佐、以廉遷(3A-2-12)→(5A-2-16)

襄賁右尉、沛郡銓、朱福、故曲陽尉、以功遷(3A-2-13)

(8) 費長、山陽郡都閔、孫敏、故広邑長、以廉遷(3A-2-14)→(5A-1-14)

費丞、汝南郡汝陰、郭□、故廷尉史、〔異動理由〕(3A-2-15)

費左尉、山陽郡薄、周□□、故〔職名、異動理由〕(3A-2-16)

費右尉、汝南〔出身県、姓名、前職、異動理由〕(3A-2-17)

(13) 開陽長、〔出身郡県〕、〈顔駿〉、〔前職、異動理由〕(3A-2-18)→(5A-2-9)

開陽丞、山陽郡栗郷侯国、家聖、故侯僕、以功遷(3A-3-1)→(5A-1-15)

開陽左尉、潁川郡許、胡忠、故御史有秩、以功遷(3A-3-2)

開陽右尉、琅邪郡柎、王蒙、故游徼、以捕羣盜尤異除(3A-3-3)

(9) 即丘長、膠〔東〕国昌武、范常、故不夜長、以廉遷(3A-3-4)→(5A-2-10)

即丘丞、東郡東阿、周喜、故頓丘北郷有秩、以功次遷(3A-3-5)→(5A-1-16)

即丘左尉、潁川郡潁陰、王昌、故大守卒史、以功遷(3A-3-6)

即丘右尉、琅邪郡房山、逢賢、故侯行人、以功遷(3A-3-7)

(12) 況其長、沛郡斬、陳勝、故陰陵右尉、以功遷(3A-3-8)

況其丞(3A-3-9)→(5A-4-3)

況其左尉、琅邪郡柔侯國、宗良、故侯門大夫、以功次遷(3A-3-10)→(5A-1-17)

況其右尉、琅邪郡石山、王奉、故侯僕、以功遷(3A-3-11)

(11) 利成長(3A-3-12)

利成丞、汝南郡汝陰、兒勲、故罷將戶車□□□□令史・水衡都尉書佐(3A-3-13)→(5A-3-1)

利成左尉、六安國六、殷順、故奮夫、以捕斬羣盜尤異除(3A-3-14)

利成右尉、南陽郡堵陽邑、張崇、故亭長、以捕格山陽亡徒尤異除(3A-3-15)

(10) 厚丘長、臨淮郡取慮邑、宋康、故丞相屬、以廉遷(3A-3-16)

厚丘丞、琅邪郡高広侯國、王雋、故侯門大夫、以功次遷(3A-3-17)→(5A-2-1)

厚丘左尉、汝南郡汝陰、陳逢、故五官□□□□、以功遷(3A-3-18)→(5A-3-2)

厚丘右尉、汝南郡汝陰、〈周並〉、故大司農屬、以功遷(3A-3-19)→(5A-2-2)

(14) (繪長)、[出身郡□]陽、王良、[前職、異動理由]遷(3B-1-1)

(繪)丞、潁川郡長社、張□、故□□有秩、以功遷(3B-1-2)

(繪)左尉、南陽郡涅陽邑、幾級、故亭長、以捕格山陽賊尤異除(3B-1-3)

(繪)右尉、東郡廩丘、張循、故白馬仁成鄉有秩、以功次遷(3B-1-4)

(16) 平曲長、梁國蒙、辛千秋、故□□□、以功遷(3B-1-5)

平曲丞、琅邪柘、胡母欽、故亭長、以捕格羣盜尤異除(3B-1-6)→(5A-2-3)

平曲尉、陳留郡[出身県、姓名、前職、異動理由](3B-1-7)

(15) 司吾長、沛郡蕭、劉奉上、故孝者、以宗室子拳方正除(3B-1-8)

(司吾丞)、右扶風平陵、〈北宮憲〉、[前職、異動理由]遷(3B-1-9)→(5A-2-4)

- 司吾左尉、魯国薛、〔姓名、前職〕、以功遷(3B-1-10)
- 司吾右尉 潁川郡許、〔姓名、前職、異動理由〕(3B-1-11)
- (18) 曲陽長、沛郡相、陳宮、故□□、以功遷(3B-1-12)→(5A-3-16)
- 曲陽丞、沛郡相、朱博、故東郡大守文学卒史、以功遷(3B-1-13)→(5A-1-4)
- 曲陽尉、汝南郡召陵、夏聖、故南海大守文学卒史、以功遷(3B-1-14)→(5A-3-3)
- (17) 臨沂長、魯国魯、丁武、故相守史、以举方正除(3B-1-15)
- 臨沂丞、沛郡建平、周朋、故侯行人、以功遷(3B-1-16)→(5A-3-12)
- 臨沂左尉、琅邪博石、成禁、故侯僕、以功遷(3B-1-17)
- 臨沂右尉、定陶国定陶、魏□、故孝者、以孝廉遷(3B-1-18)
- (19) 合鄉長、左馮翊臨晉、駱敞、故郎中騎、以詔除(3B-1-19)→(5A-3-9)
- 合鄉丞、信都郡桃侯国、李遷、故侯門大夫、以功遷(3B-1-20)
- (20) 承長、□□郡□□、□泉、故相〔職名の一、部、異動理由〕(3B-2-1)
- 承丞、廬江郡虜婁、莊戌、故督盜賊、以捕斬羣盜(3B-2-2)→(5A-1-5)
- (21) 昌慮相、淮陽国圉、蔡義、故穀陽丞、以功遷(3B-2-3)
- 昌慮丞、京兆尹新豐、馮豐、故衛尉属、以功遷(3B-2-4)
- 昌慮左尉、沛郡譙、丁禁、故貶秩郎中(3B-2-5)
- 昌慮右尉、左馮翊万年、王義、故御史有秩、以功遷(3B-2-6)
- (22) 蘭旗相、臨淮郡僮、夏彭祖、故丹徒丞、以廉遷(3B-2-7)
- 蘭旗丞、淮陽国陳、張永国、故亭長、以廉遷(3B-2-8)
- 蘭旗左尉(3B-2-9)→(5A-4-4)
- 蘭旗右尉(3B-2-10)→(5A-4-5)
- (24) 良成相、汝南郡細陽、周□、故□□□□、以功遷(3B-2-11)
- 良成丞、山陽郡橐、宣聖、故大山大守文学卒史、以功遷(3B-2-12)→(5A-1-6)

- 良成尉、□□□□、□□、故貶秩山□□□□(3B-2-13)
- (25) 南城相、[出身郡県、姓名]、故保宮北□□、以功遷(3B-2-14)
- 南城丞、巨鹿郡□、張良、故有秩、以功遷(3B-2-15)→(5A-1-7)
- 南城尉、山陽郡東緡、陳順、故大守卒史、以功遷(3B-2-16)→(5A-1-9)
- (23) 容丘相、臨淮郡睢陵、鄭賽、故丞相屬、以廉遷(3B-2-17)
- 容丘丞、琅邪郡即來、閔常、故侯行人、以功遷(3B-2-18)
- 容丘尉、潁川潁陰、東門湯、故大守卒史、以功遷(3B-2-19)→(5A-2-11)
- (29) (平曲相)、[出身郡県、姓名、前職、異動理由](3B-3-1)
- 平曲丞、潁川郡長社、□□、故潁陽大守[職名の1部]、以功遷(3B-3-2)
- 平曲侯國尉、潁川郡鄆、殷臨、故貶秩□□(3B-3-3)
- (26) 陰平相、河南郡故市、張霸、故郎中、以積功(3B-3-4)
- 陰平丞、沛郡沛、莊敏、故有秩、以功遷(3B-3-5)→(5A-4-6)
- 陰平尉、山陽郡薄、毛雲、故有秩、以功遷(3B-3-6)→(5A-4-1)
- (30) 建陵相、山陽郡单父、曾聖、故郎中、以功遷(3B-3-7)
- 建陵丞、京兆尹南陵、盛咸、故郎中、以功遷(3B-3-8)
- (37) 建陽相、山陽郡邳成、唐湯、故鄉獄丞、以功遷(3B-3-9)→(5A-2-5)
- 建陽丞、京兆尹奉明、王豐、故戊校前曲候令史、以功遷(3B-3-10)
- (31) 山鄉相、魯國魯、旦恭、故亭長、以捕格不道者除(3B-3-11)→(5A-2-6)
- 山鄉丞、魯國魯、橋敬、故亭長、以捕格不道者除(3B-3-12)
- (28) 東安相、河南郡密、[姓名]、故郎中騎、以請詔除(3B-3-13)
- 東安丞、沛郡栗、丁勲、故侯門大夫、以功遷(3B-3-14)
- (33) 都平相、山陽郡蒙、宣元、故龍亢尉、以功遷(3B-3-15)
- 都平丞、陳留郡襄邑、共褒、故□事□廩丘右尉(3B-3-16)

- (38) 都陽相、山陽郡昌邑、曹平、故郎中、以功遷(3B-3-17)
都陽(丞)、『出身郡県』、『王賞』、『前職、異動理由』(3B-3-18)→(5A-2-12)
- (36) (干郷)相、沛郡『出身県、姓名、前職』、以功遷(4A-1-1)
(干郷)丞、沛郡譙、呂遷、故有秩、以功遷(4A-1-2)→(5A-1-8)
- (34) (郡)郷相、陳留郡陳留、李臨、故侍郎、以請詔除(4A-1-3)→(5A-2-13)
(郡)郷丞、淮陽国□、管費、故將軍史、以十歲補(4A-1-5)
- (35) 建郷相、山陽郡□□、管費、故將軍史、以十歲補(4A-1-5)
建郷丞(4A-1-6)→(5A-4-7)
- (32) 武陽相、山陽郡單父、張臨、故東郡大守文学卒史、以廉遷(4A-1-7)
武陽侯国丞、汝南郡西華邑、尹慶、故武郡大守文学卒史、以功遷(4A-1-8)→(5A-3-14)
- (27) 新陽相、山陽郡蒙、張蓋之、故河内大守文学卒史、以廉遷(4A-1-9)
新陽丞、京兆尹長安、王相、故上筮有秩、以功遷(4A-1-10)→(5A-4-8)
- (39) 塩官長、琅邪郡東莞、徐政、故都尉属、以廉遷(4A-1-11)
塩官丞、汝南郡汝陰、唐宣、故大常属、以功遷(4A-1-12)
- (40) 塩官別治北蒲丞、沛郡竹、薛彭祖、故有秩、以功遷(4A-1-13)
- (41) 塩官別治郁州丞、沛郡敬丘、淳于賞、故侯門大夫、以功遷(4A-1-14)
- (42) 鉄官長、沛郡相、莊仁、故臨胸右尉、以功遷(4A-1-15)→(5A-3-10)
鉄官丞、臨淮郡淮陵、龔武、故校尉史、以軍吏十歲補(4A-1-16)→(5A-3-11)
- (43) 鉄官別作□丞、山陽郡方与、朱賢、故有秩、以功遷(4A-1-17)
- (24) 良成侯(家丞)、『出身郡県、姓名、前職、異動理由』(4A-2-1)
- (22) 蘭旗侯家丞、泰山郡嬴、□開、『前職』、以功遷(4A-2-2)
- (21) 昌慮侯家丞、山陽郡都閔、范利国、故有秩、以功遷(4A-2-3)
- (23) 容丘侯家丞、琅邪柔侯国、王謹、故侯行人、以功遷(4A-2-4)

- (25) 南城侯家丞、潁川郡周承休、王陽、故侯行人(4A-2-5)
 - (37) 建陽侯家丞、泰山郡寧陽侯国、夏侯登、故侯僕、以功遷(4A-2-6)
 - (31) 山鄉侯家丞、定陶国、朱棚、故郎中、以国人罷補(4A-2-7)
 - (33) 都平侯家丞、山陽郡黃侯国、柏世、故侯僕、以功遷(4A-2-8)
 - (29) 平曲侯家(丞)、山陽郡瑕丘、管儀、故山陽大守文学卒史、以功遷(4A-2-9)
 - (36) 千鄉侯家丞、清河郡清陽、陳九、故東武有秩、以功遷(4A-2-10)
 - (30) 建陵侯家(丞)、梁国蒙、孟遷、故象林候長、以功遷(4A-2-11)
 - (26) 陰平侯家丞、山陽郡中鄉、石勲、故侯門大夫、以功遷(4A-2-12)
 - (28) 東安侯家(丞)、濟南宮平侯国、□譚、故侯僕、以功遷(4A-2-13)
 - (35) 建鄉侯家(丞)、陳留郡僞、陳咸、故有秩、以功遷(4A-2-14)
 - (38) 都陽侯家丞、陳留郡成安、韓訢、故上党大守文学卒史、以功遷(4A-2-15)
 - (34) 部鄉侯家丞、魯国魯、曹勲、故桂陽大守文学卒史、以功遷(4A-2-16)
 - (27) 新陽侯家丞、承、匡□、故承鄉侯行人、以功遷(4A-2-17)
 - (32) 武陽侯家丞
- 凡侯家丞十八人(4A-2-18)

おわりに

本稿は、判読できない箇所が目立つ三・四号木牘について、尹湾漢墓簡牘中の関連する他の簡牘を利用して、その記載内容の復元を試みたものである。その結果は、次のようにまとめることができる。

第一に、三・四号木牘に見える県の配列については、二号木牘と同様に県の種別及び県の長官の官秩に基づいている。この原則は五号木牘にも見られ、このような書式が漢代地方行政における文書整理の書式の一つとして存在したと考えられる。第二に、五号木牘と照合すると、県名及び長吏の姓名で一致する部分が見られ、それによって

三・四号木牘の未判読部分が確認できるが、両種木牘の間には作成の時期に時間差があり、五号木牘の方が後で作成された。以上からすれば、尹湾漢墓簡牘中の二号から五号までの地方行政関係の木牘は、多少の作成時期の違いはあるとはいえ、相互に関連性のある文書だといえよう。これに前稿の結果を加えれば、三・四号木牘も他の木牘同様、墓葬に埋葬されていたものの、それは当時の状況を確実に反映しており、いわゆる明器²²ではなく歴史的な分析に耐えられる史料だといえよう。従って、これらの木牘を有効に利用すれば、従来必ずしも十分には検討されたとはいえない、前漢後半期における地方行政の実態及び地方行政組織と中央政府との関係が明らかになっていくことだろう。

ところで本稿では本来、三・四号木牘と五号木牘との作成間隔及び両種木牘の性格、そしてこれらを含む地方行政関係の木牘の作成時期を検討する予定だったが、紙幅の関係でそれができなかった。これらを知る手がかりは、両種木牘及び今回の『報告書』でその内容がはじめて明らかになった「元延二年(前一一)日記」と題される一連の竹簡群にあると考える。稿を改めて述べることにしたい。

注

- (1) 連雲港市博物館・東海県博物館・中国社会科学院簡帛研究中心「漢代地方行政文書の重大発見——連雲港市尹湾漢墓出土一批簡牘」。なおこれは若干文章を変えて『簡帛研究』二(一九九六年)に転載されている。

- (2) ここに掲載されたのは、連雲港市博物館(紀達凱・劉勁松執筆)「江蘇東海県尹湾漢墓発掘簡報」、連雲港市博物館(滕昭宗執筆)「尹湾漢墓簡牘积文選」、滕昭宗「尹湾漢墓簡牘概述」(以下「概述」と略称)である。

- (3) 「前言」は、『報告書』出版以前に一部を省略し「尹湾漢墓簡牘初探」と題して『文物』一九九六年一〇期に掲載された。

- (4) 右に掲げた文献及び注(5)の拙稿以外で、一九九八年五月現在までに筆者が知り得た尹湾漢墓簡牘を中心に取り上げた研究で、本稿にかかわるのは次の通り。

中国

- ・謝桂華「尹湾漢墓簡牘和西漢地方行政制度」『文物』一九九七年一期。以下、謝A論文と略称。

・謝桂華「尹湾漢墓新出《集簿》考述」『中国史研究』一九九七年二期。以下、謝B論文と略称。

・周振鶴「西漢地方行政制度的典型実例——読尹湾六号漢墓出土木牘」『學術月刊』一九九七年五期

・高敏「試論尹湾漢墓出土《東海郡屬縣鄉吏員定簿》的史料價值——読尹湾漢簡札記之一」『鄭州大學學報哲社版』一九九七年二期。以下、高A論文と略称。

・高敏「《集簿》的釈読・質疑と意義探討——読尹湾漢簡札記之二」『史學月刊』一九九七年五期。以下、高B論文と略称。

・卜憲群「西漢東海郡吏員設置考述」『中国史研究』一九九八年一期

台湾

・廖伯源「尹湾漢墓簡牘東海郡官文書內容雜考」『中国上古秦漢學會通訊』三、一九九七年

・邢義田「尹湾漢墓木牘文書的名稱和性質——江蘇東海縣尹湾漢墓出土簡牘說記之一——」『大陸雜誌』九五—三、一九九七年

・廖伯源「尹湾漢墓簡牘与漢代郡縣屬吏制度」『大陸雜誌』九五—三、一九九七年

・紀安諾「尹湾新出行政文書的性質与漢代地方行政」『大陸雜誌』九五—三、一九九七年

日本（日本人以外の日本語文を含む）

・門田明「江蘇省連雲港市尹湾漢墓出土の簡牘について」『中国出土資料研究會會報』四、一九九六年

・紙屋正和「尹湾漢墓簡牘と上計・考課制度」『福岡大學人文論叢』二九—二、一九九七年

・陳勇「尹湾漢墓簡牘の幾つかの問題について」『関西大學東西學術研究所々報』六五、一九九七年。以下、陳A論文と略称。

・陳勇（西川利文訳）「尹湾漢墓簡牘研究」『日本秦漢史研究會會報』一六、一九九八年。以下、陳B論文と略称。

(5) 拙稿「漢代における郡縣の構造について——尹湾漢墓簡牘を手がかりとして——」(『文学部論集』(佛教大學文學部八一、一九九七年)、及び「尹湾漢墓簡牘の史料的价值について」(『中国出土資料研究會會報』六、一九九七年)。

(6) 以下、本稿で前稿と称するのは全て前掲拙稿「漢代における郡縣の構造について」を指す。

(7) 『報告書』では、六号墓出土の木牘にYM6D1・D33の編號が与えられている。これは、従来「木牘〇号」とされてきたものの略号であって木牘番号に変化はない。

(8) 注(4)陳B論文には、その対照表が掲載されている。

(9) 前稿でも触れたように地理志と二号木牘とで文字に異なるのある県は、海曲—海西、于郷—干郷、蘭祺—蘭旗、南成—南城の四例である。このうち地理志の海曲は従来から海西の誤りとされており、尹湾漢墓簡牘によってそれが確認できる。しかしその他の三例は若干の文字の違いで、どちらが正しいかは判断できない。

その他に三・四号木牘に見える東海郡以外の地名にも地理志と若干の文字の異同があるが、本稿では尹湾漢墓簡牘を中心とする関係上、二号～五号木牘に見える地名は全て釈文の表記に従うことにする。

- (10) 前稿では断定を躊躇したが、二つの邑は、注(4)紙屋前掲論文(三七頁)以下、この論文を参照する場合は該当頁数で示す)がいうように、五号木牘正面に「胸邑」(GA-13)と「況其邑」(GA-17, GA-3)として見える胸と況其を当てるのが妥当だろう(ここに付けた略号は、後掲釈文に付した略号と一致する。次の三号木牘も同様)。何故なら、況其は前稿でも触れたように五号木牘正面の二箇所に「邑」として見えて邑の可能性が高く、さらに謝桂華氏が三号木牘に「胸邑」(GA-23~GA-25)として見えるとしたこと(注(4)謝A・B論文)が、『報告書』釈文によって確かめられるからである。ただ三号木牘では、況其の項目(3A-38~3A-3-11)には「邑」字は付いていない。これは、県名を二字で表すことから邑が省略されたと考えられる。このような例は三・四号木牘の他の記載にも見られ、長吏の出身郡県の記載で一方では「取慮」(3A-23)と記されるのに対して、他方では「取慮邑」(3A-3-16)とされる。
- ちなみに二号木牘では、この二つの邑は一般の県と同一に扱われる。ここから前稿でも述べたように、邑と一般県とは、侯国と一般県のような行政上の区別はなかったと考えられる。

ところで前稿で胸と況其を邑と断定するのを躊躇したのは、五号木牘の「繇」の項目でこの二つの県以外の厚丘丞に関する箇所に「□□邑□」(GA-2)と見え、これが胸と況其の箇所に見える「上邑計」(5A-1-13, 5A-1-17)と対応する可能性があると考えたからである。しかし厚丘丞の部分で「上邑計」と考えるのは、紙屋氏のいうように確かに文章として落着きが悪い(三七頁)。ただ五号木牘には、東海郡のほとんどの県が見えるにもかかわらず、それについての上計の記事が見えず、邑とされる二県のみについて上計に関する(と思われる)「上邑計」という記載が見られるのである。そうするとこの「上邑計」は、一般県の上計とは異なる内容を持つと考えた方がよさそうである。問題は、この「上邑計」が何を意味するかだろう。

- (11) 高敏氏は、二号木牘で長の県が一三しかないのに、一号木牘では「長十五」とされて二人多くなっている、その理由がわからないとする(注(4)高B論文)。しかし一号木牘の「長十五」には、塩官長・鉄官長の二名が含まれることは間違いない。

- (12) この点については、稿を改めて述べる。

- (13) この点については、注(4)の門田前掲論文及び紀安諾前掲論文に言及がある。前掲拙稿「尹湾漢墓簡牘の史料価値について」もこの点を意識した。

なお墓葬出土の簡牘資料全般の評価に関しては、杉本憲司「漢墓出土の文書について——特に湖北江陵鳳凰山

漢墓について——(『檀原考古学研究所編『檀原考古学研究所論集』第五所収、吉川弘文館、一九七九年)を参照。

- (14) 『漢書』卷一九百官公卿表上に「県令・長、皆秦官、掌治其県。万戸以上為令、秩千石至六百石。減万戸為長、秩五百石至三百石。皆有丞・尉、秩四百石至二百石。是為長吏。百石以下有斗食・佐史之秩。是為少吏」とある。
- (15) これはいずれも出土時の寸法である。『報告書』附録「簡牘尺寸索引」によると、脱水処理後の両木牘の寸法は、三号木牘が長さ二一・八cm、幅五・一cm、四号木牘が長さ二二・一cm、幅五・六cmとなる。

- (16) このような書式の特徴は、一号木牘にも見られる(前稿参照)。なお、一行ごとに独立した記載でありながら、しかも数行ごとにある程度まとまった記載になっている書式は、地方行政とかかわりのある一号・六号木牘の全てに見られるようで、これについては本文の五号木牘に関する箇所述べる。

- (17) 可能性としては、この切断によって実用に耐えないいわゆる明器としたことが考えられる(後掲注(32)参照)。ただし後述するように、その記載内容は現実を反映していると考ええる。

- (18) 前稿では二号木牘を上計簿作成との関連で考えたが、現在では三・四号木牘も含めてあまり上計との関係を強調すべきではないと考えている。ここで訂正したい。

- (19) 表1の(43)の部分は「釈文選」では可能性として

「胸」と釈読されていた。地理志によれば、東海郡には鉄官が下邳と胸に置かれていたから、ここは胸と考えるのが最も妥当である。しかし四号木牘の該当部分が「報告書」釈文では「𠂔」(チー)とされており、胸には当たらない可能性がある。そこでここでは、「報告書」釈文に従うという原則で、未判読文字としておく。

- (20) 可能性としては南城が一時四百石相の侯国だったことも考えられるが、本文でも述べたように四号木牘の侯家丞が長官の官秩順に記されていることからすれば、その可能性はほとんどない。ただ南城は、二号・四号木牘において常に四百石相の侯国との境界線上に置かれる傾向にあることだけは間違いない。

- (21) ここに繒以外に一字が入るとすれば、それは「邑」以外にはないだろう。しかし前掲注(10)で触れたように、邑は胸と況其の可能性が最も高く、繒が邑である可能性は非常に少ない。またここには繒以外の県が該当する可能性もほとんどないから、『報告書』釈文が想定する未判読文字の字数が誤っている可能性が高いと考える。

- (22) 紙屋氏はこの面について、「時の東海太守胡級に敬語が使用されている」から、上計に関係のない「墓主師饒の私的な控えであったことは確実である」(二六頁)とする。確かにその通りかもしれないが、その記載内容は当時の郡府における属吏の実態を物語っているものと考ええる。問題は、何故このような内容の木牘が作成されたかであろう。とりわけこの木牘に見える「以故事置」請

治所」「羸員」が何を意味するのかを考えるのが重要なのではない。前稿は、この点について試案を提示したものである。

ちなみに注(4) 邢義田前掲論文は、「輸錢都内」以下の七項目の内容を分析して、五号木牘が考課簿そのものではなく、その基礎資料だと考える(七〇―一〇頁)。詳細は別稿に譲るが筆者も現在、五号木牘の表裏両面はいずれも上計と直接関係しないものと考えている。このように考えると、前稿でこの木牘が上計と関連するとした考え方を訂正しなければならないが、それ以外の五号木牘に対する評価を変える必要はないと考える。

ところで紙屋氏は五号木牘(正面)について、一方で「上計簿の一部として作成されたものとみとめてよからう」(二五頁)と述べながら、また一方では「(上計簿作成のための)集計作業の一過程をしめす下書きとみなすべきではなからうか」(三七頁)と述べる。前者の見解では五号木牘が(たとえ控えだとしても)上計簿そのものの一部となり、一方後者では上計簿の前段階ということになる。後者の見方をとれば、紙屋氏が五号木牘の表裏の性格をまとめて「上計簿の一部をなす正面と私的控えである背面とが表裏一枚をなしていたことになる」(二六頁)という評価はできなくなり、氏の五号木牘(正面の評価には同一論文内で明らかに矛盾が見られる。背面を私的控えとみなすならば、正面も同様の性格のものと考ええる方がよいのではなからうか。

(23) 紙屋氏は前掲論文の注(44)で、「籛」の項目からその月日が県から出発した時点を表すとする(五〇頁)。筆者はさらに、この月日が「告」「寧」という欠勤を表す項目にも記されることに注目したい。「告」は一定期間が過ぎれば免官される可能性があるし、「寧」は親族の死亡という不測の事態によつて発生するものであり、この両項目に記される月日はその発生時点を表すと考える。従つてその他の項目の月日も、その事態が発生した時点のものだと考えられる。

なお「告」「寧」については、大庭脩「漢代官吏の勤務と休暇」(同『秦漢法制史の研究』創文社、一九八二年、第四篇第七章所収。一九五四年初出)を参照。

(24) 「釈文選」は標題部分を「□□「吏」と釈読するが、写真を見る限り、この欠落している部分に三字が想定できるか不安である。また「吏」と釈読される文字についても、写真に現われている字形からは「文」のようにも見える。いずれにしてもこの標題部分に関する「釈文選」の釈文には疑問が残る。

(25) 注(2)「概述」参照。

(26) 紙屋氏は前掲論文の注(41)で、その根拠には触れていないが「各項目の配列順は長吏の官秩順でもない。県の序列があり、それによつていのはなからうか」と述べる(五〇頁)。その「県の序列」とは、次に述べるような県の長官の官秩と県の種別による序列だと考える。

(27) 二号木牘によれば、干郷丞・南城丞・南城尉の官秩は

いずれも二百石である。また三・四号木牘では、必ず尉は丞の後に置かれる。このようなことからすると、同一官秩の場合、丞と尉を別けて記したと考えられる。

(28) この点については、稿を改めて述べる。

(29) ちなみに写真を見ると、3A-1-1の前に一行分の空白がある。3A-1-1から郷県の記事が始まるとすれば、この空白の部分には、二号木牘や六号木牘の各正面一行目に見られるような木牘の標題に関する記載が入る可能性がある。

なお五号木牘背面一行目の記載は、そこに見える「掾史」の総数を示したもののだが、この部分だけが段に分割せずに記されている。これも、その面の記載内容を示すという点で、広い意味では標題に当たるのではなからうか。

(30) 本文で検討した以外の五号木牘から三・四号木牘の内容が推測できるものは、次に掲げる復元試案を参照してもらうことにして、ここでは三・四号木牘から五号木牘で欠けている長吏名を推測できる例を示しておく。

一、山郷侯相(5A-2-6)→旦恭(3B-3-11)

二、威令(5A-2-8)→□道(3A-2-6)

三、干郷丞(5A-1-8)→呂遷(4A-1-2)*ただしこれは、前の考証が間違っていないことを条件とする。

(31) 改めて三・四号木牘を五号木牘と対照してみると、五号木牘には侯家丞に関する記載が一条も見られないこと

に気付く。この理由は直ちにはわからないが、可能性としては侯家丞が「侯に待す」(『統漢書』百官志五、侯国の条の本注)といわれる特殊な立場にあったことと関連するのかもしれない。しかし三・四号木牘で見ると、侯家丞から一般県の大吏に就官している場合もあるから、一概にこのように断言することもできない。今後の検討課題としたい。

(32) ここでいう「明器」とは、『礼記』檀弓上に「孔子曰、之死而致死之、不仁而不可為也。是故、竹不成用、瓦不成味、木不成斲、琴瑟張而不平、筭箏備而不和、有鐘磬而無簠簋。其曰明器、神明之也」というような、実物に似せてはあるが実用には耐えない、葬礼用の器物を指している。本稿で取り上げた一号(五号木牘は記載内容から、右のような意味での明器とはいえない)と考える。

(補注)本校校正段階で、廖伯源「漢代仕進制度新考(簡編)――『尹湾漢墓簡牘』研究之三」(上・下)、『大陸雜誌』九六一四・五、一九九八年)を入手した。この廖論文は、本稿と直接関係するものであり、三・四号木牘に関する最初の本格的な論考といえよう。

なお廖論文は、紀安諾氏より提供していただいた。ここに紀氏に謝意を表する。

付記

本稿は、平成九・一〇年度文部省科学研究費助成金奨励研究(A)に基づく研究成果の一部である。

